

えびす講がやってきた

―「西宮分社建設願」―

11月というと、西宮神社のえびす講を思い浮かべる人も多いでしょう。19日(宵宮)と20日(本宮)の2日間、本町三丁目から社へ向かう登り参道と山手通りは、善男善女でごった返し、熊手やお宝を手にした人がそぞろ歩く、初冬の桐生の風物詩です。

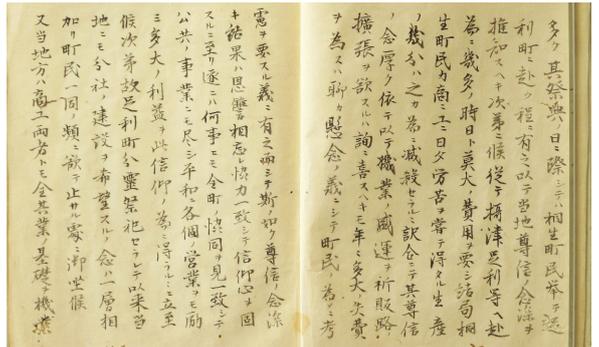
めとした商売人にとって最も大きなお祭りです。大きな店の主人ともなると、番頭をはじめとした奉公人達に、休みや昼での早じまい(物日)を与えるだけでなく、取引先の人を招き大盤振る舞いをしていたと伝える史料もあります。

これが終われば、あつという間にもう年の瀬。そんな歳時を感じさせるえびす講ですが、江戸時代には今と異なり、10月20日と年明け後の1月20日に行われていました。えびす講といえば機屋をはじめ

今と異なっていたのは、日程だけではありません。江戸時代の桐生の人々のえびす講は、それぞれの家で福や徳を招き入れ、商売繁盛を願うスタイルが普通でした。そしてえびす様へとお参りをする場合は、国境を越えて足利郡五ヶ村の西宮神社(現在の足利市西宮町)へと出向いていたようです。

今や関東一社として遠方からも信奉をうける桐生西宮神社が、兵庫県の西宮神社から宮本町の美和神社の杜へと分社されたのは、明治34年11月20日です。この時の事情を伝える興味深い史料である「西宮分社建設願」によれば、

「桐生は織物産地として一日



西宮分社建設願

とて休日を取れないほどの繁昌をみせているのに、えびす神信仰の熱心さから、足利や人によっては摂津西宮神社まで参拜に行くものも数多い。これにかかる費用が莫大なことだけでなく、遠路の参拜であることから生産もそがれてしまふので、そこで、この靈験あらたかな神を桐生にお迎えしたい。」ということが書かれ、これに続けて発起人92人を筆頭に、分社を願う400人ほどの桐生の人々の連名が記されています。

▼「西宮分社建設願」展示期間 11月1日(水)～30日(木) ※月曜日、祝日は休館です。

場所 Ⅱ 図書館1階

今月の表紙

新里中央小学校の織物教室の様子です。3年生の児童が、桐生織物協同組合伝統工芸士会の工芸士から桐生織の歴史と織物の種類を学び、手織機を体験しました。体育館には、手織機の音と子どもの歓声が響いていました。

人口と世帯

(9月30日現在)

人口	114,113人 (-44人)
男	54,963人 (-22人)
女	59,150人 (-22人)
世帯	50,003世帯 (+55世帯)

()内は前月比

今月の納税

国民健康保険税…第5期

11月30日(木)が納期限です

コンビニエンスストアや銀行などのペイジー対応ATMからも納付可能です。口座振替を利用している人は、預貯金残高の御確認をお願いします。

広告